

# 自然再生の担い手たち インタビュー

自然再生事業は、NPO や地域住民をはじめとして、多様な主体の参画と創意により実施する事業です。

いま、全国各地に自然再生に取り組む新たな担い手たちが登場しています。

阿蘇

## 安全安心な食材供給が私たちの務め

鎌倉直美氏

(農事組合法人狩尾牧場勤務)



牛が好き、阿蘇が好きで、畜産を仕事にすることを決めました。今は毎日、北外輪山上にある牧場で繁殖牛や子牛の世話をしていますが、うれしいのは子牛が生まれ牧場で元気に育っていくこと。消費者に安全安心な食材を供給するには、健康な牛が育つもとなる健康な草原が必要です。高齢化や後継者不足で難しくなっている草原の利用や維持管理を続けていくことが草原再生と考え、若い畜産仲間と一緒に、安心して働ける環境づくりや、広大な草原を活かした畜産業を盛り上げるための取り組みをしていきたいと思っています。

竜串

## 海の「花咲か爺さん」になりたい

竹葉秀三氏

(竜串観光汽船代表取締役)



子供の頃から海とともに暮らし、私を育ててくれたのは、サンゴや魚たちが豊富な竜串の海といってもよいほどです。海の汚染やサンゴの衰退を目の当たりにして、ダイバー仲間とともに海の清掃やオニヒトデの駆除、サンゴの移植などの活動をしてきました。一生涯それを継続し、かつてのような美しい海を再生させることが私の使命だと思っています。

最近は地元小学校と協力し、地元においても海を知らない子供たちに、グラスボートを使って海中公園を体験させ、竜串の海の楽しさや素晴らしさを伝えています。

八幡湿原

## 地域の自然を学ぶことで子供たちが成長する

白川勝信氏

(芸北高原の自然館学芸員)



湿原再生のため、調査・研究などに加え、環境学習にも力を入れています。子供たちは、自然の中で希少種のことや、湿原や草原の成り立ちなどを学ぶことで地域の自然の素晴らしさを知り、これをきっかけに動植物についての調査や創作活動にも展開しています。その成長ぶりは親も驚くほど。子供たちを通じて、地域の人々が八幡湿原の自然の大切さを再認識することにもつながっています。今後も学校などと連携しながら自然再生の輪を広げ、工事後の管理など次世代の担い手が育っていくことを期待しています。

小佐渡東部

## トキが棲める環境を地域ぐるみで取り戻す

高野毅氏

(トキの野生復帰連絡協議会座長)



かつて農業を営みながらトキのためにドジョウを育て、餌を与え続けた父の志を引き継ぎ、活動を続けてきました。今では多くの農家やNPO、小中学校、企業などがピオトップづくりや減農薬栽培などトキが棲める環境づくりに取り組むようになってきました。野山をトキが飛んでいた頃は、地域にとっても気持ちが豊かで幸せな時代でした。そのような暮らしを取り戻すためには、環境と農業の両立が必要です。時間はかかりますが、地域社会をあげて自分たちの暮らす環境を活かしていけるよう、出前講座などを通じて、さらに活動の輪を広げていきたいと思います。

釧路湿原

## 自然再生を市民の日常生活に根づかせたい

新庄久志氏

(釧路国際ウェットランドセンター主幹)



釧路湿原の自然再生では、250,000ha に及ぶ流域全体の環境負荷を減らすことが必要です。それには市民自身が今のライフスタイルを見直し、変えていくことが求められます。そのステップとして、市民が既にやっていることの中に、自然再生に繋がることのある、ということに気付くことが重要だと思っています。このため、数多くの活動を掘り起こし、互いに結びついていくような取り組みを進めています。さらに大きな社会の動きに発展していくよう願っています。そして市民グループが事業推進や管理の担い手になり、自然再生が市民の日常生活にまで定着していくのが私の夢です。

## 自然再生事業を進めるために

ポイント

# 1.

## (連携・協働の) 仕組みづくり

自然再生を進めていくためには、地域の多様な人々の参加と連携がキーになります。そのため、事業を進める各地域では、様々な主体で構成される協議会等を設置して、再生の目標や取り組みの方向性などについて共通認識を高めるとともに、地域資源や生業の再認識につながる調査・計画づくりやイベントなど、地元における人々の参加のきっかけとなる場を設けることにより、自然再生を地域全体の取り組みとして進めていくことを目指しています。

## 産学官民の連携・協働の場として実証試験を活用 — 榎野川干潟

榎野川の自然再生では、流域内の森、川、海に関係する地域住民、NPO、学識者、関係行政機関などが連携・協働して、荒廃しつつある自然環境、生活環境の改善を目的として幅広く活動を展開しています。干潟再生に向けて行っている実証試験は、干潟生物の生息環境を回復するためのデータ蓄積に留まらず、住民参加による干潟再生活動の普及に大きな役割を果たしています。

平成18年秋の干潟耕耘実証試験では、約100名のボランティアが参加して耕耘作業を実施。作業後には専門家の指導で干潟生物の観察会が行われ、さらに漁協婦人部

が協力して参加者にシジミなどを使用した料理が振る舞われるなど、様々な主体ができることで参加し、連携・協働の輪を広げています。



ボランティアによる耕耘作業の様子



干潟観察会の様子

## 地元農業・畜産業者による野草地環境保全に向けた取り組みの推進 — 阿蘇

### 地元の人々の手による調査・計画づくり

阿蘇の草原のほとんどは地元の集落や畜産業者の組合などが利用・管理する入会地であり、草原再生には、これらの人々による利用・管理が継続されることが不可欠です。そのため環境省では、組合等による「野草地環境保全実施計画」づくりを支援しています。これは、必要とされるボランティアや行政等による支援を明らかにしながら、地元農業・畜産業者が主体的に野草地を管理していくための方針となるものです。これまで4牧野で取り組みが進んでいますが、今後、計画づくりを阿蘇郡市内の多くの牧野に広げていくことにより、地元と行政の連携・協働体制を築いていくこととしています。

組合員自らが植物や牧野管理の現状などを調査し、今後の利用・維持管理の方針を考えることで、牧野の豊かな自然環境の重要性や現状を再認識するよい機会となっています。



組合員による現地調査



牧野の図面を用いて計画検討

### 草原再生シールを貼った農産品の流通

阿蘇の草原の野草を堆肥などに利用して生産した農産品に、生産者が草原再生シールを貼って流通させる取り組みが進められています。これにより、阿蘇の草原と消費者を結び、野菜の販売を通して草原再生への幅広い人々の参加を促しています。



草原再生シールを貼った農産品



イベント販売で阿蘇草原再生をアピール

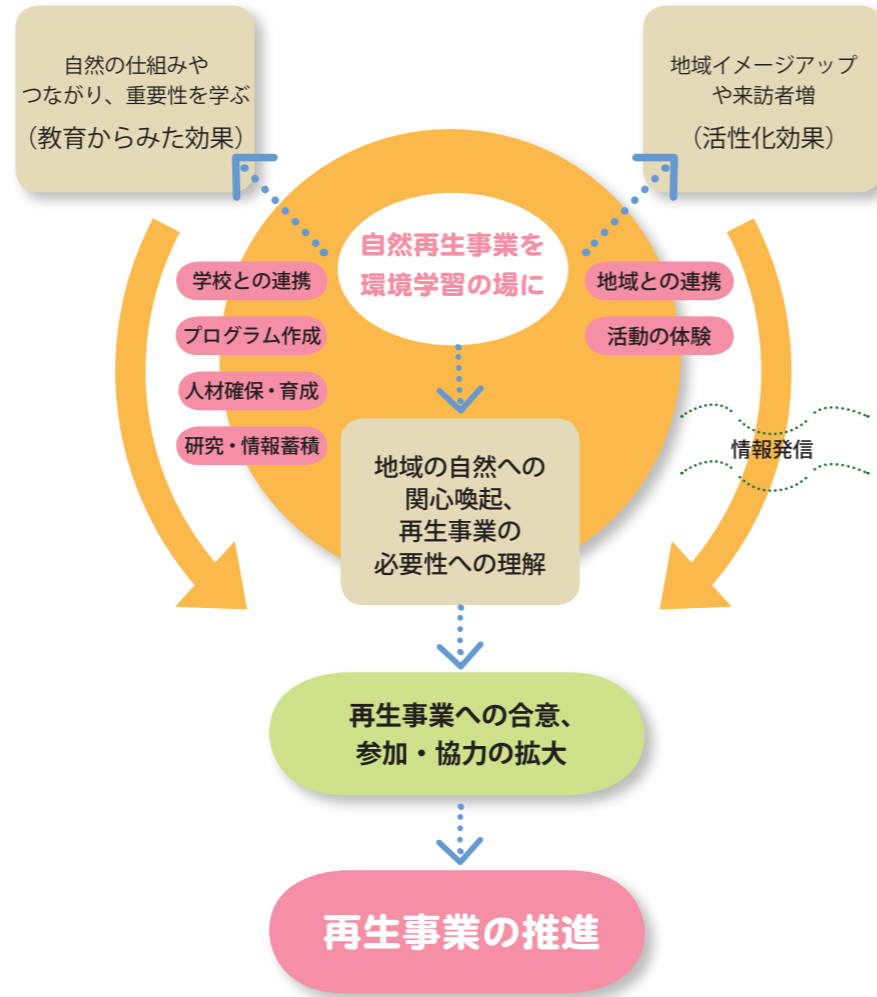


ポイント **2.**

**(自然再生事業を環境学習の場に)**

自然再生の輪を広げていくためには、地域内外の人々の理解と合意が必要です。この中で、自然再生事業地を活用した環境学習は、自然環境への関心を高める上で効果的であり、合わせてその取組内容に関する情報発信を行うことにより、自然再生に対する理解を深め、幅広い参加を促す手段ともなります。

また、自然の仕組みやつながり、重要性を学ぶ場として適していることから、学校教育の一環としても活用されています。さらに、地域内外の人々の交流機会となるなど地域活性化への効果も期待されています。



環境学習を軸に、自然再生事業への市民参加を呼びかける — 釧路湿原

釧路湿原自然再生協議会では、「自然再生普及行動計画」(平成17年6月策定)のもと、自然再生への市民参加と環境教育を促進するため、湿原再生に関連する市民活動を募集。応募のあった活動について、活動予定や実施の様子をホームページや市町村の広報誌などで情報を発信し、市民の参加を呼びかけるとともに、統一ロゴの使用を認めるなど活動のサポートを行っています。環境学習をはじめ調査・研究、コンサート開催など幅広い活動がプロジェクトに登録されており、活動の輪が広がっています。

左:「自然再生普及行動計画」冊子  
右:活動募集チラシ



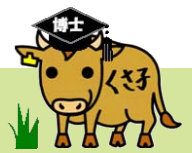
地元高等学校による、植物を利用した水質浄化実験、環境教育フォーラム開催や、NPOによる湿原観察会などを、協議会公認の「ワンダグリンドプロジェクト」として情報発信



高校生による水質浄化の取組み



NPO等による湿原観察会



維持管理作業の手伝いを通じて、阿蘇の草原の現状を知る — 阿蘇

学生や一般の人々を対象に、牧野組合等が行う採草や野焼き・輪地切りなどの維持管理作業を手伝うことで、地域の生業とともに維持されてきた阿蘇の草原のすばらしさや、草原の抱える現状課題などを学ぶことができる環境学習プログラムを展開。地元教育関係団体と協働で実施しています。



採草作業の手伝い



子どもそうげんしんぶん

●草原環境を学ぶための教材作成  
地元の子供たちが草原環境を学ぶため、カレンダー、ワークブック、子供向けニュースレター(そうげん新聞)などの教材を作成。地元小中学校を中心に配布し、環境学習を推進しています。



草原カレンダー

地元の人々も協力し、総合学習のプログラムを通年で実施 — 竜串

地元小学校5年生を対象に通年で総合学習の授業「ふるさとの海を知ろう」を実施。父兄や地域住民、専門家などが参加して授業の内容などを検討し、講師としても登場。グラスボートで竜串の海を観察したり、サンゴについて考えるなど様々な授業が行われています。



グラスボートで竜串の海を観察



総合学習の授業「サンゴの話」

「子どもワークショップ」で地域の将来像を考える — サロベツ

次世代を担う子供たちや若者を活動に取り込むため、「子どもワークショップ」を開催。地元の農家、自然保護や観光関連の方々が意見交換をし、自然観察などを行った上で、地域の自然や農業、観光、暮らしなど10年後のサロベツ地域の姿を考える取組みなどを実施しています。



湿原環境調査



調査とりまとめ

プログラムに合わせ、地元教師を対象とした人材育成を実施 — 石西礁湖

総合学習の時間を活用し、子どもパークレンジャー事業による環境教育を実施(平成14年度〜)。サンゴ礁の調査やワークショップなどを行うとともに、地元教師を対象とした勉強会などにより人材育成に取り組んでいます。



シュノーケリングでサンゴを調査



教師を対象とした勉強会